

毛皮のマリー

La Marie - Vison

寺山修司

毛皮のマリー

La Marie-Vison

・
戒名一覽 たいじょういほんごうがう

毛皮のマリー (花咲ける四十才の男娼おかま)

欣也 (美少年)

紋白 (美少女)

下男 (ああなつかしきストロハイム氏)

醜女しじめのマリー (この世で一番醜い女)

名もない水夫マドロス (蛇の刺青いれずみがよく似合う)

美女の亡霊

美女の亡霊

美女の亡霊

美女の亡霊

美女の亡霊

美女の亡霊

快樂の滓 (肉体美の青年)

鷄姦詩人1 (荊冠とよんでもよい)

鷄姦詩人2 (荊冠とよんでもよい)

ノート

・

ああ、それは夢か、まぼろしか……

時は現代。

毛皮のマリー

La Marie- Vison

1

arah Leander の“LA HABANERA” が古い手巻き式ポータブル蓄音器から、ゆっくりと流れこんでくる。大正五十七年にあたる、ある日ある時。擬古典的に装われた贅沢な一室の中央に、西洋式の浴槽があり、灯りがともると、「毛皮のマリー」が入浴している。

その傍らに、なつかしいエリツヒ・フォン・ストロハイム氏を思い出させるような下男がタオルを持って、ほぼ直立不動の姿勢で立っている。

マリー（浴槽に全身を浸し、女とまがうばかりの美貌の顔を、手鏡にうつしながら、うっとり）鏡よ、鏡、鏡さん。

この世で一番の美人はだれかしら？

下男、表情一つ変えずに

下男 マリーさん、

この世で一番の美人は、あなたです。

マリー ほんとに？

下男 鏡は うそを申しません。

マリー まあ、よかった。

白雪姫はまだ生まれてないのね。

と言って、浴槽からヌーツと足をつき出すと、それは毛深くはるか
しい男ものの足である。

マリー またのびちゃったわ、こんなに！

エバクレームつてのも、あんまり、あてにならないわね。（と脛毛を撫でまわしながら）剃刃をもってきて頂戴！

下男、神妙に出てゆく。

マリー（客席に）ほんとに、こないだ剃ったばかりなのに、もうこれなんだから（と、手をあげると、腋の下も毛がのびている）おや、ここもだ！（と撫でて）何て、栄養がゆきわたってるんでしょう。あたしにはパントテン酸カルシウムと唐辛子チンキがたっぷりあるんだわ。

でも、何も毛皮のマリーだからといって

自前で着かざることもないのにね。

下男入って来る。その手には大きな西洋剃刃を持っている。

マリー（いささか不安げに）よく研いできた？

下男 はい、マリー様。

お月様がうつるほど、ぴかぴかに、

マリー (一瞥して) あたし、痛いのは、いやよ。

下男、黙って浴槽の向う側にまわり、マリーの脛に石鹸をつけて剃りはじめる。

マリー ゆっくりやってね。

下男、黙って浴槽からあげた片足に、頬ずりするようにして剃りはじめる。

マリー、剃らせたまま手許の書物を取りあげて。それを読みはじめる。

マリー「冬のさいちゆうのことでした。王妃はかわいらしい王女をうみました。生まれた王女は雪のように白く、血のように赤い頬

をして、おまけに黒檀のようにまつ黒な髪をしていました。

そこでみんなは、この王女のことを、白雪姫と名づけました。」

下男 (きびしく) 動かないで！

マリー ……………

下男 (剃刃についた毛を洗い落しながら)

本は読んでいても構いませんよ。

あたしは、無視されるのには馴れていますから。

マリー 本に嫉いてるのね、あんた。

下男 グリム兄弟にかぎって。

あれは、本当は兄弟じゃなかったって噂ですよ。

マリー (ふいにひきつって) あ、いたたた…… (と太い男声をさすが、すぐにまた女声にもどって) 欣也は、どうしてる？

下男 応接間ですよ、

例の蝶を追っております。

マリー まだ捕まえないの、あのグズ。

下男 こんどのは、すばしっこいやつでして……シャンデリヤのかげにとまったり

大航海全書のページのあいだにかくれたりするので、坊っちゃんも音をあげていらっしやるようです。

マリイ いい運動になるんですよ、
手を借してやったりしてはいけませんよ。

下男 ……………

マリイ これは、一人息子の母としての
しつけなんですよ。

下男 でも、マリイ様。

(と言いくそうに) 折角蒐集した蝶を、わざわざ応接間に放して、
それを坊っちゃまに追いかけさせたりするのは、ひどく無駄なこと
のような気がします……

マリイ わかってますよ。

教育やしつ付けてのは、無駄なものにきまっているのですよ。

それに、窓は全部閉めきつてあるから、蝶々は外へ逃げたりする気
遣いがないようにしてあるし……(足をひっこめて) いつまで剃る気な
の? おまえ。

下男 は……(と、また剃刃についた毛を洗い落しながら) 腋の下は、い
かがなさいます。

マリイ (またポーズをとって) やってもらおうかしら。でも、その前
に剃刃をもう少し研いでおくれ。

下男、浴槽のへりをぬらしてそとで剃刃の刃を研ぎはじめる。

半ズボンをはいた美少年の欣也、大きなガラス壘に蝶をいれて、捕虫網片手に入ってくる

嬉しそうに、マリにーガラス壘をつき出して

美少年 つかまえたよ、マリーさん。

マリー (威圧的に) マリーさんじゃないよ、お母さんだって言ったろ！

美少年 ……………

マリー お母さん、って言ってごらん。

美少年 お母さん…………。

マリー 応接間の大草原は、どうだった？

迷子にならなかったかい？

美少年 ミ、ミ、ミイロタテハを、つかまえた…………。

マリー ミイロタテハを？

おやまあ、それは南米アマゾンの蝶々だよ、おまえ、ずい分遠くまで

行ってきたんだね。

美少年、喜色満面にうかべて

美少年 どうするの？ これ。

マリー 好きなように、おし。殺したら、いいだろ？ こないだはおまえ、火にくべたって言うじゃない。

美少年 ちがうよ、あれは蝶じゃなくって、

蛾だったんだよ。

ミイロタテハなんて、滅多につかまらないんだから、大切に標本にしなくっちゃ。

マリー ……………

美少年 （壇からとりだして、陽にすかして）きれいだなあ——世界中に、何匹ぐらいいるんだろう。

マリー 一匹。

美少年 一匹？（信じられないという顔で）たった？

マリー 母さんが染めたんだよ

モンシロチョウにベニオシロイをつけたんだ。(嘲笑って)

せいぜい大切にしておくれ。

泣きそうになる欣也を問題にせずに、

マリ― さあ、剃刀はよく研いだ？

下男 はい、手が切れるほど、よく。

マリ― 手なんか切らなくなつたつていいんだよ、慰謝料が高くつき
ますよ。

(と、黙って手をあげる。下男、その腋の下を剃りはじめる) こないだ、新聞を見てたらね、ニューヨークの、さる財閥の、さるお方が、インパールの山の中でつかまえたオオルリアゲハチョウをとばす会をひらいたつて記事が出ていたよ。

オオルリアゲハが見たいのか、よつほど暇なのか、財界人文化人芸能人が何と七〇〇人も集まつたんだつて。

気象庁は朝から空気の乾燥度をしらべ、

風向きまで発展して大騒ぎ!

下男 はい、そっちの手！

マリー、言われるままに手をかえる。

マリー ところが昼から小雨がふりだして、オオルリアゲハチョウは、とんだ御難にあったとき。

美少年 とばなかつたの？ そのチョウチョウ……

マリー とんだのさ、

でもニメートルだって。

美少年 たった？

マリー 運命ねえ。あわれなもんだわ。ニメートルの世界一周旅行

……（ふいに美少年に）いつまで、そんなところに突っ立ってんのさ。向うへお行き。向うへ行つて標本の整理でもしたらいいだろ？

美少年 （申し訳なきそうに）もう、しちまった。

マリー キベリタテハもアゲハモドキも、オオアカホシもみんなかい？

美少年 全部、ホルマリンで殺して、まつ毛よりほそい針で留めてしまった！

マリー 七百のチョウチョウを、全部かい？

美少年 もう、することが何もないんだ。

マリー じゃあ、向うで休んでおいで。

またあとで、応接間の草原に新しい蝶を一匹放してあげるから。

美少年（目をかがやかして）新しいチョウチョウ？

マリー ……………

美少年 新しいのだったら、ヒョウモンチョウがいいな。クモガタ

ヒョウモンか、ウラギヒョウモン。

マリー さ、坊や。満足でしょ。

だからもう向うへお行き！（小莫迦にして）半ズボンがよくお似合いだよ。

美少年 （一寸不服そうに）ぼくは、もう十八才になるんですよ、マリ

ーさん。

マリー （ヒステリックに）お母さんだって言ったろ！ お母さんだつて！

こわごとと退ってゆく美少年を、にらみつけたままで手をあげている。

下男は、とっくに剃り終っているので剃刃を洗っている。

マリー（手をあげたまま）何てグズなんだろう、あの子は……名誉ある、男色御当家家元三代毛皮のマリー様の、一人息子だというのに、あれじゃまるでそんじょそこらの、ながしおかまそっくり。

錦糸町か蒲田あたりのゲイバーにだってもう少しマシな子がいますよ。

そうだろう？

下男 あたしは、そんなところには行ったことがございませんので。

マリー（気がついて手を下ろし）やっときれいになった……コロンをとって頂戴、（と手をのびし、それをペタペタと腋の下にたたきつけながら）行ったことがなかったら行ってみなくちゃダメよ。努力なしでは、成功できませんよ。世の中はなさねばならぬ何事もつうですよ。おまえだってまだまだ知らないことが一杯あるんですよ。（半身起して）ああ、さっぱりした。あたし、午後から美容院に行つてきますわね。それから、東京文化会館へ行ってモーツァルトの交響曲

四十一「ジュピター」のアレグロ・ヴィヴァーチェー、アレグロ・ヴィヴァアーチェッ！ をきいて……アレグロ・ヴィヴァーヴァーヴァーチェッですよ。それから帰りに、マキシムへ寄ってオックス・シュモールの……オックス・シュモールの、

下男 お耳に入れておこうと思ったのですが……

マリー (うっとりとしたポーズのまま) 何よ、シュモール。

下男 御家賃のことで。

マリー オックス・シュモールの？

下男 この部屋でございます。

もう、七ヶ月たまっているそうで……

マリー ……………

下男 今月中に清算しないと出ていただくそうでございますよ。家主が、かなり強腰で、それに水道料金も、ガス代も、電気代も全部まとめて払っていただくとおりました。

マリー 言わしときなさいよ。あのオヤジは金にきたないんだから。評判のよくない男よ。

下男 でも、今月末には……

マリー 腋の下がひりひりしてきた。おお、ひりひりしてきた。

(とタオルをまきつけて、浴槽から出てくる)

マリー 着ますよ。

下男、手巻き式のポータブル蓄音器にレコードをのせる。また、ゆつくりと流れこんでくる着替えの主題^{テーマ}、Zarah・Leanderの“La

Habanera”

まず、下着、ブラジャー、そしてシュミーズ、ドレスと、一人の

「女」が出来上ってゆく。

マリー あとのことは、まかせますよ。

欣也は決して、外に出さないようにしてね。今の世の中は、あの子には刺戟がつよすぎますからね。それから、寝室をきれいに掃除して、シーツには香水をふりまいておいて頂戴！ もしかしたら、たまらなくなるような、こう毛のびっしりはえた、いい男を一人連れて帰りますからね。

そうそう、こないだ日活名画座の暗がりであたしの手をにぎってき た、あの汗くさい田吾作は、自衛隊員だったのかしら、船乗りだったのかしら。安いインクでした刺青で、腕のここんところが、青くむくんじゃって、それがまたなんとも言えず、ミリキだったけど……

下男　で、マリー様。

マリー　それだけよ。

下男　あの、昨夜の男はどういたしましたよう？

マリー　昨夜の男？（思い出して）ああ、あの快樂のしぼりつかす？
てんでけだらしのない皮かむり。

あの子、まだ気絶してるんでしょ。

下男　花を銜えたままで。

マリー　水でもぶっかけてやんな。

あの顔で、タンゴが好きなんだってさ。（すぐ思い直して）でも甘い言葉なんかかけてやるとすぐくせにするから

叩きだしてやった方がいいかもね、そう、おまえの好きな方法で追い出しておくれ。

尻をふって出てゆく。

あとに残った下男、浴槽の中を覗きこんでいるが、ふいに浴槽をこっちに向けてひっくりかえす。すると、ザーツという湯とともに、全裸の男がころがり出て来て、そのまま、のびてしまう。ああ、快

2

暗闇のなかで、短かく La Marie・Vison のテーマが軽快にうねって、イヴ・モンタンがうたっている

Elle a roulé sa bosse

Elle a roulé carrosse

Elle a plume plus d'un pigeon

そして、ヒステリックなマリーの声が、その歌を制止してきこえてくる……

マリーの声「いろんな学校があるんだよ、坊や！ 何も教科書持って自転車にのってゆく、黒板のある建物だけが学校だって訳じゃないんだよ。感化院が学校だったり、酒場が教室だったりするんだよ。」

灯りが入ると、マリーはいない……

マリーの声はテープレコーダーから流れだしているのである。美少年、はなれたところで椅子に腰かけて、そのテープの声と「話をしている」のである。

マリーの声「母さんの学校は刑務所だった。古くさいコンクリート建ての学校で、同級生はみな人殺しだの、掏摸だの、強盗ばかり！

でも、母さんは刑務所に、英雄だの冒険だのをさがしに行ったんじゃない、まじめな勉強しに行ったんです……

お食べ、坊や。

テーブルの上の林檎は食べていいんだよ。」

暗示にかかったように美少年、手を出してその林檎を食べる……それから、上目使いにテープレコーダーを見て、マリーの声を待っている。

マリーの声「ふつうの学校じゃ、いいことしなさい、って教える
だろ？ あれはこういうことなんだよ。『おまえは、ウソばかり
ついているから、せめてすること位は、ほんとのことをなさい。』

ところが刑務所であたしが教わったのは、あべこべだった……『お
まえはいつもホントのことばかり言ってるから、せめてすること
位はつくりものになさい。』

ふいに、ガタリと音がする。

マリーの声「だれか来たよ。テープをお止め！」

美少年、言われる通りにテープをとめる、と、まったく思いもかけ
ぬ高窓があいて、そこから、美少女が顔をだす！

美少年（びっくりして見上げて）チヨウチヨウだ！

美少女 ちわあ！

かわいいピンクのドレス、よく似合うリボンをつけてる。

美少女 あれ、ひとりだわ。

話し声がきこえたのに。

美少年 きみ——きみは——？

美少女 あたし？（とすっかり中に入って）あたしは、誰かしら。（ピヨンと下にとび降りて）実はあたし、一ヶ月前から、このすぐ上の部屋に引越してきた女。（低い声で）さるやむごとなきお方の、小ユビなの。（ぐるぐる見まわして）まあ、この部屋ったら、ムードねえ——（浴槽を見おろして）このイケ、鰐でも飼う気かしら。

美少年 （ハラハラしている）

美少女、浴槽を見おろす

美少女 深いわ……一メートルの絶壁って感じ。

美少年 あの——あまり、ひっかきまわすとマリーさんに——叱られるよ。

美少女 （くるとふりむいて）マリーさんて？ 毛皮のマリーのこ
と？

かわいそうな九月の桜、ゲジゲジの毛皮。

あのばばあは、一体あんたの、何なの？

美少年 ぼくの――

美少女 親ユビ？ いいひと？

美少年 お母さん。

美少女 （笑いだす）まあ、あたしとしたことが、おなかの皮がよじれるなんて、なんて行儀のわるいことでしょう。あのおへちゃ、あんたのお母さんだったの。

美少年 そう。

美少女 それは知らなかった。

ウミの母より、育ての母ね。とんだ浪曲子守唄だこと。

美少年 （少し元気をとりもどして）とつてもやさしくて、いいお母さんだ……

美少女 いつもあんたを、とじこめておくから？

美少年 とじこめて？

美少女 そうよ。いつもここから外へは出ないんですよ。

美少年 それは――ぼくが出たくないからだ。

美少女 まあ、どうして。

美少年 仕事があるから。

美少女 仕事？

美少年 チョウチョウの番をしてるんだ……七〇〇種のチョウチョウの標本を作ってる。ときには、この部屋の中で昆虫採集をすることもある……お母さんがチョウチョウを放してくれると、

ぼくは捕虫網で追いかける。すると、この部屋が南米のアマゾンになったり、

そのバスがチャド湖になったりするんだ。

美少女 （浴槽をのぞき）まあ、チャド湖に。

さぞかしエッチな怪物が見られるでしょうね。

美少年 ぼくは夢中になって、ミイロタテハやクモガタヒヨウモンを追ってゆく。

たった三メートルのこの応接間のなかで、

ぼくはマダガスカル島にも行ったし、インドにも□□□にも□□□□□□□□□□にも行った。

美少女（見まわして）ずい分、遠くまで行ったのね、費用も大変だったでしょうね。

美少年 ぜんぶ、お母さんがおぜんだてしてくれた。

美少女 （腰かける——じっと美少年を見つめる）

美少年 だからほんとはラクなんだ。

でも、ぼくは体が弱いから——仕方がなかったのさ。……

美少女 エライ人の植物採集を思い出すようなお話だわ。

美少年 そうだ、見せてあげようか！

美少年、立上って標本を取り、美少女のすぐ隣りに坐る。

美少年 ほんとは人に見せると、マリーさんに叱られるんだけど

（とモジモジして）、さわつちや、駄目だよ。（と一頁目をめくる）

美少女 まあ、みんな死んでるわ！

美少年 （かわいた笑顔で）そう。ぼくがみんな殺した。

美少女 しかもみんな磔刑にされてるわ。

美少年 そのカラスアゲハは、ぼくが産ませたんだ、おなかの大きなメスのチョウのハネをもぎとって、からだだけを壘に入れて人工的な光をあてておく。

そして水でうすめたハチミツを毎月すこしずつやる。やがて壘の底においてあるしめった脱脂綿の上に、じぶんの見た夢の卵を産みおとす……それが大きくなって、こんなまっ黒なカラスアゲハになっ

た。

美少女 ……………

美少年　そして、やっと空をとべるようになった頃、ぼくがホルマリンの壇にとじこめて、殺してやったんだ。

美少女　どうして、殺しなの？

美少年　これ以上長生きさせると翅かボロボロになって、きたなくなるだけだから。

美少女、いささか白む

美少女　すごいね、あんたって。

美少年　チョウチョウ、好き？

美少女　あたしは、クモの方が好き。

美少年　クモ？

美少女　でもほんとはオトコの方が、もっと好き。(にじり寄って)ね、マツゲにホコリがついてない？

美少年、本気でマツゲを見てやる、ふいに美少女、美少年を抱きしめようとする。

びっくりしてとび退る美少年を、美少女、追う。

美少女 どうして逃げるの？

美少年 だって――

美少女 逃げなくたっていいのよ、お医者さんごっこするだけなんだから。(猫のように喉をならして) 坊や！ 坊や！

美少年 ええええ？

美少女 あんた、孤独って何だか知ってる？

美少年 ……………

美少女 こんなさみしい晩、マリーも帰ってこない。あんたは一人、そしてもう誰も外から入ってくる気遣いもいらぬ。

そしてあたしもさみしい。

美少年 (こわごと) きみ――きみ、頭が少しヘンなんじゃない。

美少女 頭が？

(笑って) そうよ。十三のとき、空から、お月さまが落っこってきた

の。
運のわるいことに、このヘンにぶつつかって、それからずうっと、この世は闇。さみしくてさみしくて、ひとりじゃとても寝つかれないの。

美少年　ぼくは——ぼくは。

と、のがれようとする。

美少女ともみあって、美少年浴槽のすぐうしろまで逃げ、美少女の手には一本の長い髪の毛が残される。

ひくく、ゆっくりとポータブル蓄音器からZarah Leanderの「輝く三つの星」が流れこんでくる。

美少女（その髪の毛をかざして）まあ、なんて短いあんたの髪の毛。

この世で一番短い地平線……あたしね、坊や、小学校のときに地平線の絵をかいたことがあるわ。

画用紙に一本、線をかいて持っていったら、先生が「地平線はこんなに短くないぞ」って言うの。

そいであたし、その一本の線を画用紙の外へと画いてのばして行っ

て、机の上からずうっとまっすぐ教室を出て廊下を横切って校庭へと出ていった。

一本の線を地べたにかきながら、どこまでもどこまでも画いてくうちに、地平線ってのはこの世の果てまでつづくのかしらと思って…心細くなっちゃって涙がポロポロ。ああ長いものなんかかくんじやなかった。胡麻かアズキでもかいとけばよかったと思ったけどもう手おくれ。

美少年 それで？

美少女 （涙を拭いて、涙をかむ）

美少年 地球を一まわりしたの？

美少女 まさか！

あたしを何才だと思ってるの！（シナをつくって）いい具合に、途中に木があったのよ、木が。

美少年 木が？

美少女 そうニレの木…その木の幹にあたしのクレオンの地平線がまきついた。

あとは、画いても画いても一本の線はニレの木をまわるだけ、とうとう画の宿題はあきらめて、ついでに学校もやめちゃった。

感心して、聞いている美少年にまた美少女にじりよる。

美少女「地平線今日はどこまで行ったやら」——これが当時の心境
ね。

美少年 何だか、よくわからないけど、

美少女 わからないけど、感じるでしょ。(美少年にさわって) この肩
の線、腰の線。マクス・ジャコブが詩にかいた——「きみの体のす
べての線が、ぼくの水平線なんだ」って。

言いながら、手は動いて美少年のシャツのボタンを外し、それを脱
がしてしまう。

しだいに、美少女のペースにまきこまれて身動きできなくなる美少
年のズボンの前のボタンに手がかかると、

美少年 止めて！

美少女 教えてあげる。

美少年 知らない、何も！

マリーさんに叱られるんだ。

美少女 マリーに？

マリーはあなたの情婦なの？

美少年 おねがだから、ここを出てって。

美少女 いいえ、動かないわ。こんなちっぽけな応接間。こんな日あたりのわるい監獄で、南アフリカだのアマゾンだのの夢を見てるあんたに、人生つてものがどんなだか教えてあげるまではテコでも動くもんですか！

(誘惑的に) あれはいいものよ。

頭までずきんずきんするほど感じるわ。

一度おぼえたら、もう止められない。

応接間のファールブルも、書斎のオデッセアも一ぺんで参っちゃうのよ。

と、いままで静止していたテープレコーダーがひとりでにまわり出す。

そして、あのしわがれたマリーの声がひびきわたってくる。

マリーの声「出てお行き、淫売！ 売女！ あたしの坊やに、へんなモーションをしかけると、ただじゃおかないよ。」

美少女 おや、マリーさんの声だ！

マリーの声「いかにもあたしはマリーだよ。」

なつかしい毛皮のマリーだよ。

便所という便所、映画館、公園、自衛隊の宿舎から船乗りの、船ホテル。おかまならば誰でも一度は落書したことのあるなつかしい名前の——マリーさんだよ。そのマリーさんが、おまえに命令してるんだ、さあ、出てお行き！ 淫売！」

美少女 あたしは、淫売なんかじゃありません。

マリーの声「出ていけつたら、このすべた、おかま！ 空っぽの牛乳壺！」

美少年、とんで行ってスイッチを切る。

美少年（美少女に）さ、おねがいだから、出て行って。ほんとにマリーさんが帰ってきたら、大変なことになっちゃうから。

美少女 じゃ、一緒に出ていく？

美少年（首をふる）

美少女 どうして？

美少年 ここが好きだから。

美少女 うそよ、臆病なのよ。世界を見るのがかわいいのよ。いつもドアをそつとあけてそのすきまからしか人生を覗き見できないじぶんが、みじめじゃない？

美少年 たのむ、おねがいだ！

美少女 いいえ、たのまれない、おねがいでもない、あたしはあなたのチョウチョウ、

ここまで来たからには、ただで帰ったりなんかするもんですか！

美少年 ああ、おねがいだ！ マリーさんが——お母さんが。

美少女 こわいのね。

美少年 帰ってきてしまふ………

美少女 待ちましよう、一緒に。そして、二人で見てやりましようよ。あのひひばば、あの取乱すところを。人生なんて、おどかしつこの肝だめし、うそがなければ、ほんともなくなる、仮面がなけりや、ほんとの顔も見られないのよ。

と、ギーッとというドアのあく音。

はるか遠くの陽気なシャンソン。

美少年　ほうら、もうだめだ。

マリーさんが帰ってきた。

一瞬、あいたドアから、舞台一杯もある真青で大きなタテアゲハチ
ヨウが

死の影のようにあらわれる。

その怪影を見て、思わず抱きあう美少年と美少女、ふるえだす。

蝶、幻想の怪物のように、舞台一杯にゆっくりと羽ばたく。

美少年と美少女、抱きあったままで、観念している。

意外なほど近くから

マリーの声「さ、すぐ出ていかないと叩きだすわよ、この淫売！

丸めて紙くずかごとにおっ捨てて、ふみにじるわよ、このすべた！

小娘！　そして坊や。（急にやさしく）あたしが帰る前に、おとなしく一人でおやすみなさいって言ったでしょ。

寝る前にはお祈りして、もし眠れなかったら、こないだ買ってあげた「星の王子さま」でも読むといいのよ。

(ドアが風のせいか、パタン！ パタン！ と鳴る) さ、その梅毒もちの
チヨウチヨウを追いだしたら、ベッドに横におなり！ そうすれば
母さんがまた、子守唄をうたってあげるからね。

たまりかねたように美少女をはねとぼし、天上に向って膝まずいて
お祈りのポーズをとる美少年。マリーのけたたましい哄笑のうちに
ゆっくりと溶暗する。

3

間奏曲

やや長い暗黒。

シュツ、とマツチがすられ、ローソクに点される。

燭台を持ったストロハイム氏の下男、あたりをはばかりながら登場
して

下男 まつくらになりました。

だが、コブラや亀は頭をもたげ、さそりは立ちあがり、短剣は肉を切り裂くために身をかがやかし、月は真赤に地獄を照らす。

聖なる女衞は港町へ去り、

あとに残った男たちは、互^{かた}みの心臓の海に情欲の錨を投げあい、求めあい、

帆柱をこの手で熱く熱くこすりあいながら、馬よりも遅ましい死を死のうとする。

はらわたを抜かれ、

しかも盲いて、船出をあきらめた、

みずぼらしい男根の名もないおかま、

あたしのかなししい歌を一つきいて下さい。

これは戯れの、

幕間狂言なのです。

つき刺すように、バッハの「トッカータとフーガ」二短調の聖オルガンが流れこんでくる。

下男 あたしだって、馬よりも逞ましい死を死にたいけれど、この通りの醜女なの。(しだいに女ことばになってゆき、真赤な口紅で唇を彩りはじめる) 醜女のマリーと、みんなは言うわ。でも、あたしって、お月さまのもの狂い! もう、とことんまで覚悟はできてますのよ。(と立上って鬘を頭にのせる。そして「トツカータとフーガ」二短調にあわせて、両手をひろげて、まるで悪魔に憑かれたように、夢遊病のように踊り出す。それはまるで水のなかを歩いているようにゆつくりとしている。踊りやめると、手鏡をとり出して覗きこみ) ああ、うまいこと自分自身に化したもんだな、これはあたしにそっくりだ。しかも、誰にも見せたことのないほんものあたしにそっくり。

また、いとおしそうにしみじみと、ビンのほつれをいたわる。それから、手鏡をじーっと見つめているが。

下男 鏡よ、鏡。鏡さん。

この世で一番の美人は誰かしら? (自分自身で鏡の声色)

「ここではあなたが一番きれいです。

でも、白雪姫はあなたの千倍もおきれいです。」

まあ、あたしの千倍も。千倍と言ったら、百かける十、十かける百

……九百九十九よりも上の数字。(すぐ、話しかける調子にもどって)で、その白雪姫ってのは、一体どこにいるの？

「わかりません。」

それは遠いはるかな他国の森、あるいはおちぶれた魂の約束の港、まだ見ぬ母のふるさとか、名もない場末のゲイ・バーか。」

ひどく遠くさみしく、なつかしの流行歌「影を慕いて」が流れこんでくる。だがそれには地獄からのすきま風のように、ヒューヒューと針の音がまぎれこんでいる。

下男 では、どこまでも白雪姫をさがしにいきましょうか？ それがあたしの「夜への長い旅路」なら、たとえ豚箱、檻の中、安キヤ巴厘にトルコ風呂、刑務所までもいきますよ。でもあたしって(と、唇を撫でながら)ばかね。

ジーン・ハーロウの映画、観たことある？ ジーン・ハーロウはとてもいい女でしたよ。

百万人に愛されて、映画の中でも何度も死んだ、そう、何度も死んだ。

おまけに映画の外までも酔っぱらって、

自動車事故で死にました。

死に方はぜんぶまちまちで、それぞれべつの名前がついていた——
すてきね、何度も死ぬる人は、何度も生きられるんですね。

あたしなんざ、一度くたばったらそれでおしまい。安い棺桶に入れられてトカトントンと埋められて、ヘンリー・マンシーニの音楽どころか、お経の長さも料金分だけ。

一度死んだら、それつきり。

だから、こうして変装して「ミモザ」になったり「マリー」になったり、鬼神のお松や八百屋お七になったりするの。せめて、キモチだけでも、何度か死ぬために。

それにしても早まったもんだ。

「毛皮のマリー」になる位だったら白雪姫になるんだったわ。いつ

そひと思いに、マリーを死んで、生まれかわるとしましよるか！

と鬘を脱ぐ。と、高らかにピアノのイントロが流れこんできて、毛

皮のマリーの合唱と手拍子！

悪夢のように美しい毛皮のマリーが、一人二人三人、と舞台にとび

こんできて、華麗にダンスしはじめるのだ！

Elle a roulè sa bosse

Elle a roulè carrosse

Elie a plume

Plus d'un pigeon

La Marie-Vison

Du côté d'la chapelle

C'est commo' ca qu'on l'appell

Méme en été elle a sur

l'dos

Son sacré manteau

(couplet)

Mais un soir un soir ce fut

plus fort qu'elle la r'la
Qui s'est mise à pleurer
Et son secret, son secret
trop lourd pour
Dans un bistrot me l'a
Confié

七人の毛皮のマリー、それぞれの美しい女装の「マリー」になり切
って、シャンソンの合唱のなかで踊りつづけて、夜の長さを忘れさ
せる。ふいに、すべての音、カットアウトして、

マリーの声「何だか、台所がさわがしいよ。

誰か見てきておくれ。一寸！一寸！」

たちまち、七人のマリーたち消えて、下男ももとの「下男」にもど
ってしまふ。

下男（奥へ向って）はい、マリー様！
すぐ参りますよ。

(客席に向って) ああ、また死に損ってしまいました。こんどこそ本
当に、

馬みために遅ましい死を、持ちあわせたいもんだ!

4

三日後。

浴槽には、たつぷりと湯がみなぎり。

男たちには欲情がみなぎり、それらを「時」の回路として、
やがて、うす赤い灯の下で刺青をした水夫が全裸で、向う向きに立
っている。

テーブルに対して、まるで放尿でもしているようなポーズだ。毛皮
のマリー、きわめて古典的な羽毛の扇子を片手に使いながら、じつ
と、水夫のすることを見守っている。ややはなれたところ、ソファ
ーの上に二人の裸の男が、みだらに、しかしミケランジェロの絵の
ように戯れている。いわば地獄のインテルメッツォ。

沈黙ののち。

マリー (白紙をテーブルから取上げて、収獲物のようにひらひらさせながら) ほうら、よく画けた。これはなかなかの大物だよ。こんなにあざやかなかたちにとれるんだったら、鉛筆で輪郭をなぞったりせずに、いっそ絵具壺にでもどっぷりと浸して、肉の魚拓にでもした方がよかった。

(まだ、同じポーズのままにいる刺青の男に) さ、もうおしまいだよ、下着をおつけ! その熱い茎から、みずみずしい樹液のこぼれないうち。

刺青の男、もぞもぞとブリーフをはきはじめる。うしろ向きのまま、はき終って主人の命令を待つ番犬のように、マリーの様子をうかがっている刺青の男。

マリー ほんとによく、出来ている。これは神さまの最近作のうち

でも、傑作の一つですよ。

今までずい分いろんな男のものを、このテーブルの上にのせて、白紙の上にかたちどったけど、こんなふうに遅ましいのはなかった：…ふちどってるうちに、手がふるえてくるなんてことはありませんでしたよ。

刺青の男　しかし、マリイさん。

こんなことをなさって、一体どうするつうつもりです？

マリイ　どうするって？

刺青の男　まさか、よそもんに見せびらかすつう訳でもなかんべえし。

マリイ　まあ、名案ね。(意地悪く笑って) 樞画廊でも借りて、展覧会でもひらこうかしら。人がいっぱい、集まるでしょうね。そして、これを見ながらさまざまの妄想をいだくでしょうね。これは、いわば名曲の楽譜みたいなもんだから、眺めていても感動しないけど、思い出すと頬があかくなってくるという仕組み、ね。

おや、外は雨が降ってるのかしら。

刺青の男　半時間ほど前から。

マリイ　まあ！ (といまいましたげに) あたしは雨が大きらい。雨とき

ただで、頭の蓋がゆるんでくるんだよ。一日中、ボケーツとして、何もする気がなくなっちゃうの。

刺青の男 なるほど。

マリー あんたは、平気なの？

刺青の男 ええ、何とか。

マリー まあ、タイガー！ とても遅ましのね。どうして？

刺青の男 ながいこと、雨傘のセールスマンをしておったです。

刺青の男、申し訳なさそうに、弁解する。

刺青の男 四、五年も前も前の話で、やんすが。

マリー 雨傘のセールスマン。自然にさからう道具を売りあるく

男、ますますタフだわ。あたしみたいに、運命に背中を吹かれっ放

しで歩いてきた女には、神さまの雨に傘で立向うなんて、大それた

ことなんかとても出来ないんですよ。

刺青の男 (きっぱりわからず) はあ。

マリー あたしって、雨のもの狂い。お月さまのもの狂い。あんた

のためのもの狂い。そしてあたし自身のもの狂いなの。

(手をポンポンと打つ)

ポーズをとっていた二人の裸の男のうちの一人が、さっとマリーの前に、（やはり番犬のように）様子うかがいにあらわれる。

マリー せっかく、この水夫とムードマドロスになつてきたら、雨がふりだしたの。

男 雨は。おきらいで？

マリー 大きい。雨は神さまの、バルトリツヒ氏腺液ですよ。ねばねばしてて、えげつないわ。何とかしてほしいの。

男1 しかし、わたしらは。

男2 詩人として雇われておりますんで。

マリー 詩じゃ、雨を降りやめさせることはできないって言うのね。（いらいらと）それはどの力はないって言うわけね。

男1 詩人は、ことばで人を酔わせる酒みたいなもんです。ときには、ことばで人を傷つけたりすることもできる。ようくみがいたことばで、相手の心臓をぐさり、とやる。

男2 場合によっては、ことばで人を殺すことだってできますが、

男1 雨だけは、だめです。あいつばかりにや、ことばは勝てぬ。

マリ― (ヒステリックに) ふん。

ご立派なもんだ。ゆきずりの、雨には適わぬことばで、人を殺したりできるなんて、思い上った商売ですよ。

男1 そのかわり、気晴らしに美しいことばで、何かをほめるというのはいかがでしょうか？

マリ― いいわ、それで気晴らしになるのなら、あたしがこの水夫マドロスと愛しあってるあいだ。美しいことばをそこらじゅうまき散らしておくれ。

男1と2、ひそひそと相談しているが、

男1 七五調がよろしいでしょうか、それとも自由律がよろしいでしょうか？

マリ― (ふんぞり返って) 古典的なのがいいよ、できるだけ荘重なのが。

男2 風景をほめましょうか、それとも、人をたたえましょうか？

マリー あたしだよ。

あたしをたたえておくれ。美しいことばで、じっくりとあたしのこの肌にみがきをかけておくれ。

男1と2、胡弓をかかえて弾きながら、七五調を吟じはじめる。そのあいだマリーは、刺青の男を浴漕にいざない、彼をその中に横たえて、上から愛撫しはじめる。

詩は断絶するが、愛撫は断絶しない。

かなり長く、マリーの手は刺青の男の肌の上を這いつづけているのだが、浴漕にかくれているので、その細部は見えないようになってくる。

男1 ああ この黄昏に 人よ

水について語るなかれ

ヴェニスを歌って何になる

ときこそ今は 青春は

ただにマリーを嘆かせるのみ

ああ マリーよ

その盗まれた立ちすがたよ

その毛脛のくぼみに群れ舞うかなしき鳥たちよ

鎖をとき放っておくれ

港はあまりにも遠く

死者はあまりにも老いすぎた

男2 ああ マリーよ

帆柱に釘づけにされて死んでいった。

昔の情熱よ

しんそこ青い伝説の空に

そなたを讃えるために

薔薇を焚いて

一すじのけむりを立ちのぼらせることにしよう

ああ マリーよ

あこがれの番犬 薔薇殺し

刑務所ですごした二百十日

火事のなかなる一台のピアノよ

燃えてうたいつづけるのは
まぼろしのステファアノだ

ああ マリーよ

聖なるおかま 監獄の熾天使

味噌汁の地中海にうかべた漕役船の

魂の航海図よ どうか

塩の木からおりてきて

かなしみの少年の辜丸を洗ってやっておくれ

やがて、しずかに Zarah Leander "LA HABANERA" が流れこ
んでくる。

鶏冠詩人の男1と男2、マリーと刺青の男が愛撫に熱中しているの
を見とどけてゆつくりと出てゆく。やや長い沈黙のシーンがつづ
き、マリーゆつくり身を起す。

マリー シャンペンでも、飲む？

刺青の男 シャンペン？

マリ― 喉が火事なの。(猫のようにゴロゴロならして) あんたのせい
で。

刺青の男 おれのせい？

マリ― (まだ残っている欲情の目で、刺青の男をじっと見る) そうよ、あ
んたのせいで。あんたのせいだよ。真夜中、人目もおそれず引っぱ
り込んだだけの値打は充分あったわ。(溜息をつく)

刺青の男 おれも、こんなにいいもんだとは思ってもみなかった。

マリ― もう離れられないわ。

もう、あんたはここから当分出てゆくことは出来ないんだわ、タイ
ガー。

刺青の男 (虎のように) おーおーおーおー！

マリ― (シャンペンを注いでやって) うんと吠えて頂戴！ もつと野
性的に。

刺青の男 うおーおーおー！ おあーおーおーおー！ ああーおーおー
おーおー！

一息に、シャンペンを飲み干して

刺青の男 それにしても、マリーさん。あんたは、どうして女に変装したりするんだね？

ちゃんとした男つうものがありながら

マリー それはあんたが刺青をしてると同じことよ。どうしてそんなものを彫るの？ きれいな肌がありながら。（刺青の男、こたえない）ちゃんとした男でありながら、男であるだけじゃあきたらず、警察官を演じたり、船乗りを演じたり、思想家を演じたり、フットボール選手を演じたりする人がいっぱいいるのに、おかしいじゃありませんか。女を演じるのだけを、好奇の目で見るなんて。

刺青の男 しかし、マリーさん、船乗りや警察官つうのは、あれは職業だ。実業つうもんだべ。

マリー あたしだって実業家よ。

（と肩をそびやかして）

でもおかねになるかどうかは、二次の問題ね。人生は、どうせ一幕のお芝居なんだから。あたしは、その中でできるだけいい役を演じたいの。芝居の装置は世の中全部、テーマはたとえ、祖国だろうと革命だろうとそんなことは知っちゃあ、いないの。役者はただ、

じぶんの役柄に化けるだけ。これはお化け。化けて化けてとことんまで化けぬいて、お墓の中で一人で拍手喝采をきくんだ……

刺青の男 お墓の中で耳をすますと、

きこえてくるのは拍手じゃなくて、木枯だろう？

マリ おお、木枯だってすてきじゃないの？ あれは木の拍手、風の喝采よ。

刺青の男、ひどく朴訥に、しかし真剣になって

刺青の男 でも世間の人は、あんたのことを何と言って噂してるか、知ってるかね？

マリ 知ってるわ、おかま！ ホモ！ 男色！ ゲイ！

刺青の男 ほかにも、まだ、

マリ まだ、何て？

刺青の男 （口ごもっているが、思いきつて） へ、へ、へ、変態！

マリ （やさしく笑って、男のグラスにシャンペンをみたしてやる）そう。世間の人はあたしのことを、自然じゃないって仰言るようね。作りもので、神さまの意志にさからっているって。でも、そう言う人に限って、庭に花の種子をまいたりすることは平気なんだ。神様

とはまるで無関係の、一袋二十円の種子なんぞまき散らし、それが自然を冒瀆してるなどとはツユ思わない……いいえ、どうせ、人生には自然のままでもいいものなんて一つもありやしないんだよ。

刺青の男、シャンペンのグラスをおく。

マリーがいささか怖くなってくる。

ドアの外で美少年の歌っている小学校唱歌がきこえてくる。

刺青の男（気にして）あれは？

マリー あれは、あたしの一人息子ですよ。

あたしが十六のときに生まれました。

刺青の男 生まれた？

マリー ええ、あたしはあの子の母親なんです。おかあああああ

あさんなんですよ。

刺青の男 まさか。（冗談だと思って）

それも芝居だというんだな。そう、役まわりだというんだ。

マリー おお、よく言いました。役まわりです、その通りです。し

かも、かなりの当り役で、お互いに母子そっくり、幻滅しあい、にくみあいながら生活しているんですよ。

刺青の男　で、あの子のほんとうの母親は？

マリ－　死にました。

刺青の男　死んだ？

マリ－　ええ、もちろん。あたしが殺したんです。さ、坊や、くわしく話してあげるから、もつとこつちにお寄りなさい。（とじぶんからにじり寄ってゆく。刺青の男すっかり薄気味わるくなつて、退ろうとするのだが、マリ－の手がすでに肩をつかんでいる）お知りになりたい？
くわしいお話。

刺青の男（ドギマギして）　ええ、まあ。機会を見て、ゆっくり！

マリ－　しつ。話するなら今よ。今しかないのよ。……うすぎたない身の上話。呪われた殉情詩集、もう何べんも話したのですつかり要領よくまとまっている、あたしと一人息子の、かなしい因果話：

：

そのとき、ビクターの犬を抱いて、知らずに入ってきた美少年、話

し声に思わず耳をそば立てる。そして、そつと物陰に身をかくす。

マリー あたしは、片隅の大衆食堂の娘なんですよ。生まれは、五反田か蒲田あたりで屠殺場へゆくコンクリート道路に面した、ガタピシの安食堂。朝からレコードがなりつ放し。(「アリューション小唄」が、風にまぎれて幻聴のように流れてくる)

そこであたしはお店手伝っていたけど、ほかの店員さんが、みんな女でしょ。いつのまにか、一人だけ差別されるのが、やになつてきたのね。

お風呂も一ばんあと、寝るところも一人だけべつべつ。みにくいあひるの子じゃあるまいし、おちんちんがくつついているというだけのむごい仕打！ ああ、こんなマルハのウインナーソージみたいなものが、なかったらどんなにいいだろうと、鉄片手に泣きあかした夜も一夜ならず、二夜三夜。

ところが、お店に一人金城かつ子という店員がいて、その子がとてもかわいい子だったの。その子が一人だけあたしに親切で、あたしにブラジャーだのセーターだの、いろんなもの借してくれたので、あたし、いつの間にか女になりました。あたし、しんげんに、

生理のときにはタンポンとナプキンとどっちがいいのかしら、とかお鼻少し高くした方が似合うかしらそれともこのままでいいのかしら、とか……サツマイモが好きになれないのは女としての修養が足りないんじゃないかしら……と考えたわ。たった一冊の「女学生の友」を二人でまわしよみして、お風呂まで一緒。ようやく一人前の女の子になれかかったのが、あたしとしては十六の秋、ね。

（短い間）でも、あの女金城かつ子は、だんだん、あたしの方が女の子として魅力が出てきたことに、嫉きもちをやくようになってきた……そう、あの子ときたら、顔の印刷が少しずれていて、ことはひどいスースー弁。一目で「奥の細道」とわかる野暮ったい子だったので、あたしの美貌が気になりだした訳なのよ。これはとんだ「白雪姫」の物語で、その子——いままではあたしにやさしかったのが、だんだんあたしを邪魔にするようになってきた。「鏡よ、鏡、鏡さん。この世で一ばんきれいな人は、だれ？」とかつ子がきくと、鏡はあたりをはばかりのような声でこたえたもんだ。

——それはマリちゃんです。

この世で一ばんきれいなのはマリちゃんです。

そこでかつ子は言ったんだ。

——マリーは男よ。あの子は女じゃないのよ。

だけど鏡は首をふるだけ。

——それはマリちゃんです。それはマリちゃんです。マリちゃんです。

かつ子はその鏡を、真夜中にコンクリート道路まで捨てにいきました。やがて、長距離トラックが来て、それをこなごなに持って行ってしまいました。その夜のかつ子の目と来たら、まるで何億光年も向うの星のまばたきも見のがさぬというほどに、つり上って燃えていました。

あくる夜、あたしが蒲団へ入っていると、かつ子がそーっと入ってきました。あたしが腹這いになって、リボンの騎士の出現今やおそしとマンガ本めくっていると、かつ子の手があたしのシミーズの上から、おしりの上のあたりをゆっくりと撫でまわすんです。一寸したら、夢の中の散歩ね。あたしとしたことが、ついうっとりして両足をすこしこうひろげたら、あの子の手がすべりこんできて、シミーズの下の素肌にふれて下から逆撫をするようにして、あたしの一番感じやすいところをさがしあてようとするの、そう、まるでひばりの巣から卵を盗む時みたいに息をつめて、すごく真剣に。——あな

た赤くなったりすることはないので、さわられてるのはあたしなんだから。

やがてだんだん、あたしも気持がよくなってきて「かっちゃん」と言いながら抱きつこうとすると、あの子は自分の体をすこしづらして、あたしの手がとどかないようにするので、あたし、ついにたまりかねて地声を出しちゃったのよ、(地声で)「ああ、かっちゃん！ たまんないよう！」

するとあの子、探しものがやっと見つかったときみたいにとび上って電気をパッとつけたわ。そうして大きな声で叫んだんだ。

「地獄だよ、地獄だよ。」

マリーのからだを見てごらん！」

一斉にとび起きてきた女店員たちの前で、あわてて前をおさえているあたしは、化けそこねたキツネ。性の波打際をさすらう、かなしい流しの歌うたいってサマだった。かつ子は、充血した目であたしのそれを指さして「これで女の子なんだって。」

これで女の子なんだって」と火事のように哄笑し、みんなもドツと笑い、観察し、あたしはいたたまれずに夜の大通りへとび出して行ったわ。そしてその夜、あたしは復讐を誓ったの。かつ子をどうして、あたしと同じ位の恥かしい目にあわしてやろうか、もつとも女ならではの恥辱は、何だろうかって。

刺青の男 わかった！

さつきドアの外でうたっていた子は、あれはあなたの子なんだ。

マリ あたしの子？

マリ、とてつもなく長いキセルにつめた煙草に火をつける。そして、ゆっくりと瞑想にふけるように喫みはじめる。

刺青の男 そう、あなたの子なんだ。あなたはそのかつ子という女を強姦して、妊娠させた。そして産んだ子をひきとった。母親への憎悪をうえつけるために。あの子のドアに外から板を打ちつけて、監禁同様——仇討ちしてるって訳なんだ。

マリ ……………

刺青の男 つまり、あなたはあの子の父親なんだ。

マリー、喫ったけむりをゆつくりと吐き出す。長い沈黙がある。

マリー うそですよ。

あの子は、あかの他人ですよ。あたしがじぶんでかつ子の体にさわったりなんかするもんですか。食堂の常連のニコヨンに金をつかませて強姦させたんですよ京浜東北線の線路の上で。

夏の日ざかりで、かつ子はずい分出血がひどかったけどだんだん、よくなってきた、その労働者の背中に爪を立てて、身ぶるいしていたわ——あたしはそれを、草のしげみのあいだから、じつと覗いていた。

あの子の表情、というよりは、女そのものの表情を、そっくり盗んでやるために。(やわらかく笑う) やがて、かつ子は妊娠しました——そして子を産んで、難産で死にました、まだ体がすっかり出来ていなかったのね。

あたしは赤ん坊をひきとって育てました。男の子だったけど。これからじっくり手間をかけて女にしちゃうの。ひどいグズだけど、心は純粹。まるで小鳥みたいにみずみずしい坊や。だから、それをあたしの手でこう作りかえていまにセックスの汚物を捨てる肉の屑籠

にしてしまうつもりなんだ。

美少年、そこまで聞いていたたまれなくなってビクターの犬を、古いポータブルの前に置き、夢遊病者のように出てゆく。

刺青の男　ほんとかね？　マリーさん。

マリー　（笑ってるだけ）

刺青の男　うそでしょう？

マリー　世界は何でできてるか考えたことある？　水夫さん。マドロス表面

は大抵、みんなウソでできているのよ……牛肉の缶詰のレッテルだ
けの話じゃない、人生っていうのはみんなそう！　表面はウソ、だ
けど中はホント。中はホント、と思うには、表がウソだといわなき
やならない。

ね、そうでしょ？

魂が遠洋航海するためには、からだの方はいつも空騒ぎ！　いつで
も二つの追っかけっこでジャンケンで敗けた方がウソになってホン
トを追っかける。

歴史はみんなウソ。去ってゆくものはみんなウソ、あした来る鬼だ
けが、ホント！

(煙草のけむりを吐き捨てて)

さ、これでおしまいよ。

あたしの身の上話は……

ゆっくりと溶暗。サスポットの中にうきあがる犬と蓄音器が、偶
然の組合せでそのままビクターになると、レコードがまわりだし
て、流れる音楽はヨハン・セバスチャン・バッハの「トツカータと
フーガ」ニ短調である。

5

・ 暗黒のなかをバツハのオルガンがうねっているが、やがて青い照明
のなかに、ぼんやりと浮き上ってくる応接間の中。

水の中でも歩くように、夢遊病者の美少年あらわれて、しばらくは

魔に憑かれたようにさまよっているが、やがていままで採集したチヨウチヨウの標本をさかさまにして、振ると、中から無数のチヨウチヨウがこぼれ落ちる。

美少年、浴槽へ近づいていき、そこから大きな死んだコイをつかみだし、それを床の上に叩きつける。

そこにかかっている母親の（マリーの）ドレスを片っぱしから破き捨てて、泣きだす。

美少年 何もない……もう、何もない。

思いきって昆虫の採集網をへし折る、とそつとドアあいて、入ってくるのは美少女だ。

美少女 おやおや……荒れてるのね、ずい分と、

美少年 何もない……もう何もなくなってしまうんだ。

美少女 どうしたのよ、一体。（と、なぐさめるように）ひどく顔色が、お悪いようよ。それにチヨウチヨウをこんなにかたしたりして。

美少年 もう、美しくない……ちつとも美しくない……こんなチヨウ

ウチヨウなんか。

美少女（しみじみと）趣味なんてかわるものよ。

人間のすることですもの。

美少年 （いらいらと）ちがう！ そんなじゃないんだ！（美少女の

入ってきたドアの方の様子をうかがうように）誰にも逢わなかった？

入ってくるときに、

美少女 どうして？

美少年 母さんに見つかったら、大変だから……

美少女 母さんなら、隣の部屋で水夫といいことしているわ、いま

通ってくるるとき、ドアの外まで声がきこえてた。猫みたいに、のどをごろごろ鳴らしていたわ。

美少年 みなこわしてやる！

母さんのやってくる前に、何もかもこわしてやるんだ。

美少女 どうして？

美少年 復讐だ——ぼくには、まるで知らない世界が、そう何も知らないうちにどんどん進んでいる。

南米アマゾンの大草原、死んだチヨウチヨウ、テーブルの上のたった七十センチ位の旅路。行こうと思えば 十秒もかからず行ける部屋のすみからすみまで。そのくせ、何だかとてもはてしない……

お母さんはぼくを憎んでいる

ぼくは、ひとりぼっちなんだ……

美少女 だから来てあげたんじゃないの、あたしが……

美少年 どこから？

美少女 世界の一番遠い場所から。

美少年 何しに？

美少女 みずくさいわね。

あんたが好きなの。

美少年 ぼくが？

美少女 あんたを誘いだしに来たの、この化物屋敷から……ここはとても、あんたなんかの棲むところじゃない。表面はすごく高つぼいけど、よく見ると虫くいとホコリが一杯！ 蓄音器の中には油虫が巢喰っているし、豪華な洋服ダンスの中は空つぼ。しかもあのひびばああときたらとてつもない怪物なんだから。

美少年 ……………

美少女 でも外へ出れば、こんなじゃないわ。

空はとても青いし、冒険だって一杯ある。

美少年 冒険が？

美少女 さあ、出ていきましよう。

美少年 どこへ？

美少女 どこへだっていいのよ、ここから逃げ出しさえすれば、

美少年 逃げる——って？

美少女 出ていくの。

もう帰ってこないのよ、こんなアツシャー家にはさよならを、ばらまくの。

美少年 でも——

美少女 さあ、グズグズしてるときじゃないのよ、あなた。

美少年（混乱して）ここは、化物屋敷で、外へ逃げると外にはもう

怪物はいないんだね。

美少女 外はすばらしいわ！ 扇風機じゃなくて、ほんとの風が吹

いてるもの。

美少年（念を押して）あの——外にはもう怪物はいないんだね。

美少女 ええ。

美少年 きみは男？

それとも女？

間。

美少女 あたし、あなたを好き。

愛してる！

美少年 ぼ、ぼ、ぼくを？

美少女 ええ、とつても——あなたに見せてあげたいの、世界や、そのなかにきらめいている色んなもの、サーカスだの夜店だの、色鉛筆だの、スポーツカーだの、お祭りだの、劇場だの、花火だの、チヨウチヨウの百倍もあるような飛行機だのを。

そして、あんたがまだ一度も経験したことのないあのこと！

美少年 あのこと？

美少女 快樂！

美少年 か、か、か、快樂って？

美少女、すばやく手をのばして、また美少年を抱きしめようとす

る。美少年、それをふりほどくと、美少女ひっくりかえる。

だが倒れたままで、美少年を手招きしはじめる。ひどく誘惑的に。

美少年 （ますます混乱する）お母さんが……

お母さんがやってくる！

美少女 平気よ、やってきたって。

あのひびばあ、ほんとはあんたとは何の血のつながりもないんだから！

美少年 何のつながりもない……そうだ何のつながりもない。

美少女 だったら、いらっしやいよ。

あたしの横に！

それともまだ、あの年増のおかまが、こわいの？

美少年 怖くなんかないさ！

（怖さにおびえながら）怖いもんか！

と、おずおずと近づいていく。

ふいに美少女の手がのびて、美少年を自分のかたわらにひき倒す。

そしてガムシヤラに抱きしめてキスしようとする、美少年泣きそうになって暴れながら

美少年 叱られる、叱られる！

美少女 (手をゆるめて) 誰に？

美少年 毛皮のマリーに、ぼくのお母さんに！

美少女 ふるえてるのね！

あなたの目の前に、世界が今薄目をひらきかけているのよ。さあ、目をとじて。

あたしの言う通りにして！

美少年、気持では抵抗しているのだが、目は言われた通りにとじる——そして闇の中をまさぐるようにして立上る。

美少女 さあ、ここはどこ？

南アマゾンの河のほとり？ それともインパールの高原？

美少年 (怒鳴るように) 見たくない！ ほんとは何も見たくなんか
ないんだ。

美少女 でも見なきや駄目よ。

どうせいつかは見ることになるに決まっているんだから……

美少年 まっくらだ。

何も見えない。

美少女 ほんと？

美少年 （しばらく努力しているが）いや、見えるぞ、何もかもウソでぬりかためられた一つの世界が……

そこでは、ぼくはとても老けている、今よりもずっと老けている、ドライフラワーに日の影、もう誰もうたわなくなったツアラレンダーの古いシャンソン、お母さん、あんたはすでに死んでいる。

ぼくは——そのお母さんのお墓参りのために、白い花を買いにゆくところだ。

美少女、その美少年にくちづけようとするどと恐怖におびえた美少年の手が美少女の首にかかって、きつくしめはじめ。

美少女 （苦しさに目を白黒させて）やめて！ やめて！ 目をあけて、あたしを見て！ あたしが誰だかわかんないの？

美少年 汚い！ 汚い！

化けそこなったキツネなんか。

美少女 止めて、止めてったら……愛してるのよ。あなたが、あなたが、欲しいの！

美少年 何も言うな何もかも見たくないんだ……愛してなんかほしくないんだ。

と、しめ上げる。

美少女、息絶えてばったりとくずれおちる。

美少年、すばやくあたりを見わす。

ふたたびヨハン・セバスチャン・バッハの曲が流れこんできて、美少年、少女やコイの死体を見下ろしながら、腰かけてさらにスクラップブックの蝶を、（花でもむしり捨てるようにして）

上機嫌で笑いはじめる

美少年 ああ終ったぞ。

これ、全部の標本を作らなきゃあな。

そうだ（と立上って）ほんとお母さんを探し出して、それも標本に

してしまわなきゃ。

と夢遊病者のように出てゆく。

やや長い沈黙。酔ってふらふらになった毛皮のマリー、入ってきて、

マリー おやまあ、何て散らかしてあるんだろう！ チョウチョウに、コイ！（びっくりして）それにまあ、女の子までも。（手をポンポンと打つ）一寸、来ておくれ、居間がてんでこまいしていますよ。

下男、無表情でしかし早く入ってくる。

下男 はい、マリー様。

マリー 欣也はどこへ行ったの？ 欣也は。すぐにつれてきておくれ。そして片付けるようにと言って頂戴！ お母さんは、何ごともちらかしっ放しにしてはいけないって、しつけてある筈。

チョウチョウも、コイも、女の子も全部、もと通りにするようになさい、ってね。あの子と来たら、ほんとうに何一つ世間知らずで、人生ってものを勉強してないんだから。

下男 はい…… マリー様。

マリー どうしたの？（いらいらと）欣也をすぐに呼びもどすように
って言ってるんですよ。

下男 それが……

マリー それが？

下男 欣也様はもう出ていっておしまいになりました。たぶん、も
うお帰りになることは、ありませんでしょう。

マリー （鼻先で笑って） 出て行ったって？ 出て行ったって帰って
くるんですよ。

あの子はどこにいたって、たとえ地球の向うの一番遠い星の上にい
たって、あたしが呼びさえすれば必ず帰ってくるのですよ。あた
したちは、母ひとり子ひとりなんですからね。

（無窮の時のしじま、はるかな星に呼びかけでもするかのように）

欣也！

欣也！

欣也！

（手を拍つ）

欣也、帰ってらっしゃい……

すると、まるで催眠術にでもかかったように美少年、呆然として入ってくる。もはや、それは憑かれた人形にすぎない。

マリー　ほうら、帰ってきた。

(下男に) あたしの言った通りだろ！

(喜んで) だめじゃないの坊や、こんな一杯お部屋を散らかしちゃきれいにしなきゃ駄目だと言ったでしょ。言うことをきかないともう蝶々をとばしてあげませんよ。(と肩を抱くようにして浴槽のふちに坐らせる)

さあ、坊や、町でとつてもいいお土産を買ってきてあげました。

(とカツラをとり出して) これからおまえはとつてもきれいな女の子になるんですよ。(と美少年の頭にのせる)

ほうら、よく似合う、あたしの思ったのとそっくりだ。

(と口紅をとり出す)

(ゆっくりとテーマがながれこんでくる)

さ、顔をあげて、お母さんの顔をよく見て（と言いながら、ゆつくりと化粧してやりはじめる。しだいに、美少年が美少女になってゆく……）
どうして泣いたりなんかするの？

坊や

おまえは今にこの世で一ばんきれいになるんですよ。

笑いながら、しだいにくつきりと人形に目鼻立ちをつけてゆくうちに、ゆつくりと幕になる。

カーテンコール。

高らかにシャンソン「毛皮のマリー」の歌。灯りが入ると壁画「最後の晩餐」のポーズで十三人のゲイが並んでいる。出演者一同、一列に並んで礼をして

幕